

主体的に学ぶ生徒の育成

～登場人物を深く多面的に捉える学習の積み重ね～

藤原一恵

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: fujiwara_kz@tottori-u.ac.jp

FUJIWARA Kazue (Tottori University Junior High School): Fostering students who learn independently. ~Accumulation of learning to grasp the characters deeply and multifaceted~

要旨 —主体的な学習者を育てるためには、主体的になれるスキルを身に付けていけばよいのではないかと考えた。小説文の学習において、登場人物を多面的に捉える学習を通して、より作品を深く読み取り、自分の考えを広げることが出来た。昨年度から行ってきた学習の成果を検証する。

キーワード — 登場人物の分析, 自己調整, 3人グループ, 多面的

Abstract — In order to nurture independent learners, I thought that it would be good to acquire skills that allow them to be proactive. In learning novel text, I was able to read the work more deeply and expand my thoughts through learning to perceive the characters from multiple perspectives. Verify the results of the learning conducted since last year.

Key words — Character analysis, Self-Regulation, group of three, diversified, pleotropic

1. はじめに

1.1. 国語学習の課題

2021年度から全面実施されている学習指導要領では、「子供たちがさまざまな変化に積極的に向き合い、他者と協同して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することが出来るようにすること」が求められている。それらは「主体的・対話的で深い学び」の実現によって図っていくことが示されている。

実際に、さまざまな災いが起こっている時代の中で社会を託された子ども達には、何事に対しても主体的に考え、行動できる力や、多様な見方や考え方をし、よりよい選択をしていける力が必要である。そのためにも主体的に学ぶ姿勢や多種多様な見方・考え方に触れる学習活動が必要である。学んだことを活かせる子どもたちを育てていきたい。

1.2 生徒の実態

コロナ禍において学校生活も大きく変化した。

各行事が中止または規模の縮小や内容の変更をしたうえで実施されるようになり、各学校で受け継がれてきた恒例行事を知らない生徒ばかりになってきている。また、楽しい食事の時間であった給食も黙食の徹底により、クラスの友達と会話を楽しむこともできなくなっている。そんな生活の中で子どもたちは、人との関わり方さえも分からなくなっているように感じる。実際に、仲の良い友達以外のクラスメイトには話しかけたことがない生徒が多い。物を拾ってもらったり、配ってもらったりしても「ありがとう」と返すことさえもできていない。自然な関わり方さえも制限されているのではないが、制限の中で生徒の関わりの幅は非常に狭いものになっていると危惧している。

また、国語学習の必要性を生徒に問うたところ、日々の生活に支障がないのであまり必要を感じていない生徒が3割見られた。確かに日常生活では困難を感じる場面は少ないかもしれないが、関わりが減った生活の中では「より伝わる」体験を感じることも少ないと思われる。そこで、授業では3人グループの言語活動を積極的に取り入れてき

た。(2021 藤原)

2 研究の目的

国語学習において、作品の読み取りを「登場人物の分析」を重点的に行うことで、主体的に作品に向き合う態度を育て、さらに自分の考えを広げたり深めたりする自己調整力を養うことが目的である。

3 研究の内容

3.1 育成したい資質・能力

生徒自身が主体的に学ぶための手順が分かれば、個人の読書活動においても、または映画鑑賞においても、他者との関わりにおいても、多様性を認めて受け入れることができ、生涯にわたって能動的に学び続けられる。作品に出会い、読み方を学ぶことでスキルアップを重ね、主体的な学習者へと育てていくことを期待している。

3.2 具体的な取り組み

小説文の学習において、作品を深く読み楽しむために、登場人物が「どんな人なのか」を探っていく。作品ごとに課題を挙げ、その解決のために3人のグループで協力して登場人物についての多様な見方をしていく。

グループは国語学習のためのグループであり、1年を通してメンバーは同じとしている。生徒たちが学習のために力を合わせ課題解決に取り組みたい相手を考えてメンバーを決めている。例えば、国語が苦手な生徒は得意な生徒と一緒に、話すのは好きだけれど、文章にまとめるのは苦手な生徒は作文や発表が上手な生徒、得意な生徒は苦手な生徒や発想が豊かな生徒といった具合で、グループを組んでいる。通年同じメンバーで学習を行うので、学習を重ねるたびに関わり方もうまくなっているし、自然な会話ができるようになっていのは大変効果的だと考え、この方法を継続して行っている。昨年度は話せる関係づくりをねらった単元学習「聞き上手になろう」によって、活発な話し合い活動ができるようになった。(2021 藤原)

1年生では「さんちき」「少年の日の思い出」のなかで、登場人物がどんな人物かを読み取るトレーニングを行った。2年生では「辞書に描かれたもの」「走れメロス」を引き続き登場人物が「どんな人か」についてグループで分析を行った。「走れメロ

ス」では、パネルディスカッションを行い、グループでまとめた意見を発表したり、議論したりすることを通して、自分の考えをまとめる活動を行った。

特に、「走れメロス」については平成28年度と令和元年度にもパネルディスカッションを取り入れた実践をしているので、それらとの比較をすることで成果と課題を検証していきたい。

4 授業の実践

4.1 「さんちき」(1年)

「さんちき」は幕末の京都で車大工の弟子である三吉が親方とのやりとりを通して、「仕事に対する誇り」や「弟子への深い愛情」を学び、自分自身も立派な車大工になると決意する物語である。

登場人物を分析するとはどういうことかを初めて学ぶ教材であった。

表1 「さんちき」学習過程

	学習活動
1	登場人物についての情報を集める 行動・発言・境遇(時代背景を含む)・容姿について書かれている部分を集める。
2	集めた情報を整理し、別の言葉で言いまとめる 「あほう！」→怒りっぽい、短気 8歳で弟子入り→あまり裕福ではない!! 親に甘えることもできない、厳しい世界で生きている
3	言いまとめた人物の特徴を発表 親方は、怒りっぽいが三吉のことをかわいがっている。親方が怒るのは、三吉を一人前の車大工に育てたいからだ。 三吉はまだまだ子供であり真面目な人ではないが、親方には従順で頑張って車大工の仕事覚えようとしている。
4	出てきた意見から人物像を文章化 親方:道具を大切に扱っているのは、車大工の仕事には多くの人の命が懸かっているからだ。そんな仕事をしていることを誇りに思っているし、それを三吉に引き継いでもらいたいと思っている。三吉を自分の子供のように思って大切にしている。 三吉:まだまだ未熟で子どもっぽいところがあるが、幕末の厳しい時代の中で「車大工」の仕事の意義を知り、しっかりと受け継いでいきたいという覚悟を持つことが出来た。
5	各自の読み取りを共有 生徒の文章をプリントにして配布。

4.2 「少年の日の思い出」(1年)

客人の子供の頃の苦い思い出が語られる。それは蝶の収集に熱狂していた「僕」が隣人エーミールの育てた蝶を盗み、つぶしてしまったものだった。犯してしまったことは取り返しがつかない

いのだと悟り、「僕」は自分の収集を手で押しつぶしてしまう。

表2 「少年の日の思い出」学習過程

	学習内容
1	初読の感想から作品についての疑問点を挙げる。
2	みんなで考えたい疑問を決める 「なぜ『僕』は蝶をつぶしてしまったのか」
3	登場人物の分析 「さんちき」での学習をもとにグループごとに「僕」と「エーミール」の人物像について考える
4	分析結果を発表 僕:熱中すると周りが見えなくなるし、あまり先のことを考えた行動が出来ていない。エーミールのことを良く思っていない。 エーミール:冷静で我慢強い。努力家。
5	「なぜ蝶をつぶしてしまったのか」についての考えを各自で文章化し、各グループで読み合う。

4.3 1学年での実践の考察

どちらの作品も初読の感想と異なった人物像を捉えられたことが、作品を読む楽しさにつながったようだ。

「さんちき」では、書かれていることをそのまま鵜呑みにしてしまい、それを人物の特徴だと考えることが多かった。例えば、「もったいないやないか。」「そんなええのを使うやつがあるか。」という親方の発言から、「親方はケチな人だ」という捉えをしていた。しかし、時代背景や親方の仕事への情熱や責任感などを読み取っていくと、「よい道具は車に乗る人の命を守るために使うから怒ったのだ。やはり親方は仕事に真剣に向き合っている人だ。」と読み取れた。一つの言葉だけで判断せず、その前後やその背景にある物事を関連付けて考える必要があることを学習した。

「少年の日の思い出」の初読では、「エーミール」に対して大変悪い印象を持つ生徒が多かった。しかし、同様に人物分析をしていくと「僕」の方が感情的で幼稚な人であり、「エーミール」はとてもしっかりとしていて努力家で賢い人だという印象に変化した。ここでは、各グループ代表が登場人物をどのように捉えたかについて発表した。生徒 A は初読の感想に「エーミールがすごく嫌な人で、僕が悪いんだけど、でも腹を立てた気持ちがわかる。」と書いていた。グループでの話し合いでは「僕」と「エーミール」を比較して、それぞれの人物像を探っていた。その中で、「エーミール」が「僕」よりも蝶を大切に育てたり、丁寧に扱っていることが分かり、「誰よりも蝶のことが好きな人だと考えた。だからこそ、『僕』が盗みをしたことよりも、蝶を雑に扱ったことを責めていたんだと思う。」とまとめることができた。また、その発表を聞いて、生徒 F は

「エーミールは感情を表に出すのはうまくないけれど、隣に住んでいる同じ趣味を持つ男の子ときっと仲良くなりたかったと思う。蝶を盗まれたり壊されたりしたことは悲しかったと思うけれど、何よりも僕とはもう友達になれなくなったことがとても残念だったと思う。それが罪を犯すことで、取り返しのつかないことなんだと分かった。」と自分の考えと友達の考えを比較して聞くことで、自己調整された考えが述べられていた。

4.4 「走れメロス」(2年)

人を信じられないディオニス王の邪知暴虐を阻止するため、友を人質にしたメロスは刻限までに苦難を乗り越えて走りきり、王を改心させることができた。

表3 「走れメロス」学習過程

	学習活動
1	通読し、初読の感想
2	パネルディスカッションについて知る テーマ:「メロスは真の勇者か?」
3	登場人物を分析 メロスはどんな人物か。既習のスキルを用いて分析していく。
4	ディスカッションに向けて考えをまとめる 質問や反論の準備
5	パネルディスカッション「メロスは真の勇者か?」 各クラス2回実施
6	パネルディスカッションの振り返り 再検証:自分の考えを文章化する
7	グループ内で発表

4.5 生徒の変化

3年前の授業実践を取り入れた。(2019 藤原) この実践では、「メロス」という人物に興味を持って取り組んでいたのが印象的だった。読めば読むほど、「正義のヒーロー」「先のことを考えない自分勝手な人」といった初めの印象が変わっていくのだが、別の特徴を見つけることを楽しんでいるようだった。そして、「そんな完璧な人はおらんだろ。」「みんなにも弱いところはあるじゃん。」と完璧ではない勇者に魅力を感じていたようだ。

さらにパネルディスカッションでは、「妹の結婚式のためにセリヌンティウスを人質にするのはひどい。」ということについて議論し、「メロスにとってはたった一人の家族であり、親の代わりに務めていたのなら、妹の家族を作ってやってから死のうという強い愛情があったからだ。」という考えに至った。ここで推察できることは、「さんちき」の親方や「字のないはがき」の父親の愛情表現と、メロスが結婚式を行うことがつながってきてはいないかということだ。物語で出会う様々な人物から、多様な見方や考え方ができるようになってきていると感じた。

そしてこれは3年前に同じように持ち上がった生徒との実践の中にも出てこない捉え方であった。

また、パネルディスカッション後に自分の考えを文章化した中で、グループで話し合った時と意見が変化した生徒も見られた。様々な人物の分析結果やその根拠と自分の考えを比較検証し、新たな考えを導き出していた。次に紹介する。

メロスは「真の勇者」だと思います。メロスは親友が住んでいる町の人を守るためにすぐに行動しました。メロスがあの場合で行動しなければきっともっと多くの人が犠牲になったと思います。たった一人の家族である妹とずっと一緒にいたかったと思いますが、短い時間で大きな決心をし、怖いと思うけど友やたくさんの人々の平和と安心を取り戻すために出陣しました。すごい勇気がいったと思います。また、疲れている場面がありますが約40キロの道のりです。その中で川を泳ぎ切り、山賊を倒し、峠を駆け下りたのだから相当しんどいはずですが。途中で弱音を吐いてもおかしくないと考えました。最後、「勇者はひどく赤面した。」とあるのは、町の人や親友を救い、勇者となったからだだと思います。そんな勇者でも赤面することがあり、太宰さんはどんな人でも勇者になれると言いたかったんだと思います。

この中にある「すぐに行動したこと」を初めは自分勝手に思い付きで行動する迷惑な人だと考えていたが、メロスの正義感の表れであると考えが変化した。また、メロスが乗り越えた試練を具体的にイメージし、そのつらさを想像することでメロスの行動に誤りがないという考えに至っている。

5 成果と課題

作品ごとに登場人物に注目して読み取っていく人物分析の学習は、初読の感想と全く異なる見方や考え方に至ることが生徒自身にとっても、興味深い活動となっているようだ。「走れメロス」の学習では、初読の段階で「メロスはすごい人みたいに書かれてるけど、よく考えたら結構計画性がなくていろいろな人を巻き込む迷惑な人だよな。」と、休憩時間に感想を話している生徒が見られた。個人差はあるであろうが、学習の積み重ねにより多角的な視点を持って作品を読むことが出来るようになってくることの表れであると推察される。

また、登場人物分析の学習を繰り返して行うことによって、学習の手順が分かり効率よく話し合いが出来ていた。例えばマッピングや人物相関図を用いて話し合う。そしてそこに加えていく情報も、テキストの抜き出しだけではなく、その発言や行動の意味を人物の境遇や時代背景を踏まえて考え、多面的な人物像を描くことが出来るようになった。

そして、グループ学習やパネルディスカッションといった全体発表を終えた後の各自の読み取りは、グループで話し合っただけで意見を交換することや、他グループの発表を聞くことで自分が思い浮かばなかった考え方を知ることができて、より多角的・多

面的に作品と向き合うことが出来ている。更に、パネルディスカッションなどの意見発表の場を設けることで、誰が発表者になってもよいように、皆が話し合いに参加して学習に取り組むことが出来ている。これらのことがより深い話し合いに至ることに作用している。

そしてこの学習の積み重ねにより、自分の考えに近い意見から適切な表現を取り入れて言い換えたり、初めの考えとは異なった考えに変化したことを、友達の発表を根拠にまとめたりするなど、自己調整を図って自分の考えをまとめることが出来る生徒が増えている。

多面的・多角的な読み取りが出来てくると、さらなる課題も見えてきた。登場人物についての分析スキルが上がってくると、物語の背景や原作とのつながり、作者との関係などにも興味を持ち、調べたことを取り入れて新たな見方を発見する生徒が増えていた。より多角的・多面的に捉えようとするならば、限られた授業時間の中でやりくりしながらも作品の背景にあるものについて触れることも必要になると考える。また、この度のパネルディスカッションでは「メロス」に特化しすぎたため、他の登場人物との関係性についての意見が出て来なかった。ここについて考えていくことも、作品を読み深めることには有効であるので、登場人物の関係性に着目するような学習課題設定や授業構成を考えていきたい。最後に、学習後アンケートの回答を紹介する。

【登場人物分析の学習でどんな成果があったと思いますか】

- ・人を一つの見方だけでなく、多面的に捉えることで、良いところや悪いところが分かったので深めることで人の内面に注目する力がついたと思います。
- ・人物分析をすると文章の一つ一つの意味を考えて作品を観る視点が変わってきます。作者の誘導で良い奴だと思っていた人が、実は悪い奴みたいなのが起きるので、文章がよりおもしろく読めるようになったと思います。
- ・私はものごとを一方的にしか観られなけれど、いろんな人との意見交流から、メロスを多面的に観られて、メロスを深く知ることが出来ました。これは作品だけではなく、日頃からも出来ると思うので、やってみたいです。
- ・人物分析をすることで、他の物語などが深く読み取れるようになったり、自分と違う立場の人の意見を受け入れたりすることに抵抗が少なくなった。
- ・一度読むだけでは分からなかったことが見えてくることの楽しさに気付いた。それは人とのコミュニケーションにも言えるのではないかと気付いた。
- ・自分に当てはめてもっと深く人物分析が出来るようになったし、物語の中の鍵となる場面や伏線にも気付けるようになった。

参考文献

- ・中学校学習指導要領(平成29年告示)文部科学省
- ・藤原一恵(2019) 主体的な学びのためのやりくり「話したい・書きたい」と思わせる仕掛け 鳥取大学附属中学校研究紀要